川上　高司　ブログ　アーカイヴ

2014年

4月4日

オバマの憂鬱ーウクライナ危機がアフガニスタン政策に与える影響

クリミア半島をめぐってロシアとヨーロッパおよびアメリカの対立が解消されない。4 月 1 日 NATO はロシアとの軍事協力を解消すると発表、アメリカも黒海に艦隊を派遣するなど、軍事的な緊張が高まっている。ロシアは軍事介入を否定しているが、ヨーロッパはロシアがウクライナに軍事介入するのではないかと疑心暗鬼である。

だがその軍事的緊張はアフガニスタンにまでは届いていないようである。NATO の高官は「アフガニスタン政策ではロシアと上手く行っている。問題はない」と涼しい顔である。ヨーロッパはアフガニスタン北部からロシアを経由してポーランドに至る北部ルートの補給線に物資の供給の４０％を依存している。またロシア製ヘリコプターによるアフガン軍の訓練や麻薬対策でもロシアとの協力体制が不可欠である。ロシア側も特に協力を拒むこともなく協力体制は「ごく自然な流れ」と言う。

一方アメリカにとってもロシア経由の北部ルートは重要である。パキスタン経由のルートは政情不安であり、タリバンの本拠地を通過するためリスクが高くまたコストも高い。国防総省の高官は「仮にロシアが北部ルートを閉鎖してもかまわないが・・・その分コストが嵩みリスクが高まる」ので、うまく行っている現状維持を望んでいる。また、アフガニスタンでは大統領選挙が行われ、アメリカや NATO は今年末までには撤退をする。アフガニスタンの政情はきわめて不透明であり、ロシアがアフガニスタンの安定に果たす役割は重要となってくる。欧米諸国としてはロシアの力が必要なのである。

要するにウクライナ危機はロシアと欧米の関係にそれほど影響を与えていないということである。ロシアと欧米は結局はウイン・ウインの関係なのである。

4月7日

紛争解決のための紛争ーシリア内戦の深みにはまるアメリカ
クリミア半島の行方ー内向きなアメリカ国民

3 月 28 日、オバマ大統領はサウジアラビアを訪問しアブドラ国王と会談した。サウジアラビアとは昨年シリア攻撃を断念し､イランとの宥和路線を取り始めてからぎこちない関係であった。今回の会談でもイラン問題やシリア問題が話題になることは間違いなかった。

そのシリア問題でオバマ大統領はこれまでの慎重な姿勢から、より積極的な関与に転ずる可能性が出てきている。アブドラ国王との会談ではシリア反政府側への軍事支援の内容について話し合われた。

軍事支援についてはオバマ大統領は供与した武器が過激派の手に渡る可能性を危

惧して慎重な姿勢を見せ、支援は人道的支援にとどまっていた。だが今回の会談ではより踏み込んだ支援へとステップアップするようである。

アメリカの支援内容は、ワシントンポスト（3 月 28 日）によれば反政府軍への軍事訓練を実施することが主となっている。この訓練は CIA が監督する。反政府側はアメリカの特殊部隊の支援を求めているが、そうなると軍事的な介入へとより近づくことにもなりかねない。

また反政府軍はかねてから対空ミサイルの支援を求めているが、過激派へ流れる危険が大きいのでアメリカは頑なに拒否してきた。サウジアラビアは、反政府軍の身元確認を厳格にして過激派を排除すると主張し、さらに供与されたミサイルの追跡もすると主張して対空ミサイルの供与の許可を求めている。アメリカが対空ミサイルを許可したら内戦は一気に拡大する恐れがある。なによりもシリア政府を支援しているロシアとの関係にも亀裂が入る可能性が大きい。

反政府軍の言い分は「アサド政権が軍事的に優勢だから外交交渉ができない。軍事力で解決しないことをわからせるために戦闘を激化させる必要がある」から、軍事支援を拡大してほしいというものだ。もしオバマ大統領が反政府軍への軍事支援を拡大したらこの言い分を認めたことになる。外交交渉のための戦争という理屈をオバマ大統領は認めるのか。昨年 9 月に外交によってシリアへの軍事攻撃を回避してからわずか 7 か月、オバマ外交の真価が問われている。

4月18日

混迷するウクライナ－慎重なオバマ政権とロシア

ウクライナ東部では親ロシア系住民の中にはロシアへの編入を希望する声が高まりつつありウクライナは分裂の危機を迎えている。東部の都市ドネツクでは独立か、ウクライナに留まるか、ロシアへ編入かを決める住民投票を行おうという機運が高まっている。ドネツクの近くのクラマドルクスにはウクライナ暫定政権の軍が投入され親ロシア側への鎮圧に乗り出したとの情報も流れている。

もっとも東部の大半の住民は平穏に生活しており一部が親ロシア自警団を結成して対抗しているにすぎないようである。鎮圧に来たウクライナ軍の中にも自警団側に立場を変える者が出たりと現地はかなり混沌としているようである。

ウクライナ軍の出動によって内戦へ突入する危機とロシア軍の介入が取り沙汰されているが、ロシアは介入には慎重な姿勢を見せている。

一方アメリカのオバマ政権も、ウクライナ情勢には距離を置いている。マケイン上院議員やウイズリー・クラーク元 NATO 司令官は、アメリカがウクライナ暫定政権へ軍事支援をするように強く求めている。暫定政権の軍は装備も貧弱であり、防弾ベストや通信機器など基本的な装備の支援を必要としている。アメリカはそれらの装備を支援するのはもちろん、より積極的な支援に乗り出しロシアの脅威に備えるべきだというのが彼らの主張だ。

だが、オバマ政権はそれらの軍事支援はロシアを刺激しかねないと慎重な姿勢を守っている。そもそもウクライナへの軍事支援がアメリカの国益なのかどうかという議論もまだない。また現在の NATO 自体も暫定政権ではなく、5 月 25 日の選挙を経て正当な政権が確立するまでは支援を控えるという慎重な対応をしており、それがウクライナ暫定政権の不満を高める要因となっている。

シリアの内戦においても反政府側を支援する国、政権を支援する国が関与してきたため戦闘は長引き政治的解決が困難になっている。ウクライナでも双方を外国諸国が支援すればシリアと同じ道をとりかねない。最初の一歩は小さく気軽に踏み出すがやがて泥沼と化す。ディンプシー統合参謀本部議長がシリア軍事攻撃の際にいみじくも語った「軍事介入をする時は出口戦略を立ててから」という言葉をかみしべるべきである。

4月24日

誰が得をするのか－ロシアとアメリカの関係悪化を望むネオコンたち

米国務省の中東担当者が、ソ連崩壊後現在に至るまでにアメリカはウクライナの民主化に対して 50 億ドルの支援をしてきたことを明らかにした。そのため最近のウクライナ内紛に関して裏で扇動しているのではないかとの疑惑がもたれているがそれについては担当者は「あくまで自発的なものだ」と否定した。

ウクライナを巡ってアメリカとロシアの関係が悪化しかねない状況にあるが、関係悪化を望む勢力がアメリカ国内に存在することは確かだ。昨年来アメリカとロシアは良好な関係を構築しそれがイランとアメリカの宥和路線、シリア問題に大きな影響を与えて来た。裏を返せばロシアとアメリカの関係悪化は中東情勢に悪影響を与えるということである。

イランとアメリカの宥和路線を望まず、シリアのアサド体制優位を望まない勢力といえばネオコンである。かつてブッシュ政権時代にイラク戦争へとアメリカを駆り立てた彼らは今再び静かに着実に勢力を盛り返しつつある。彼らが政権への圧力を強めていく可能性は否定できない。

オバマ政権は、ウクライナ情勢を見つつ悪化するようであればさらなる経済制裁を検討するがそれはロシアを直接対象にするものではない、と報道官は述べた。ロシアを刺激しないようにという配慮が見て取れる発言である。ケリー長官はラブロフ外相と電話で情報交換を密にすることで合意するなど、いまのところアメリカは冷静さを失っていない。

一方のロシアも冷静に対処している。ラブロフ外相はケリー長官に対して電話会談では「ウクライナ暫定政権が治安を回復し過激派の暴力を止めることに責任を持って欲しい」と要請した。支援するなら監督責任をまっとうしてからロシアに文句を言いなさいということだ。これはウクライナにアメリカが関与することを認めるとも取れる発言である。ロシアがウクライナ東部に軍事介入するかどうか、についても「東部の自治体首長から軍の派遣要請は来ているが、正直困惑している」と軍事介入には慎重な姿勢を見せている。

イランとアメリカの宥和路線が進む最中にウクライナ情勢は勃発した。シリアでアサド政権が優位に立つにつれてウクライナ情勢は激化していった。そしてネタニヤフ首相とオバマ大統領のぎくしゃくした関係、サウジアラビアとのこじれた関係などアメリカをめぐる外交関係は大きく変動している。遥か彼方のウクライナがそのあおりを受けたわけではない、とは言い切れない。